沼津市
明治史料館通信

1996．1．25（季刊 年4回発行）Vol. 11 No. 4　通巻第44号

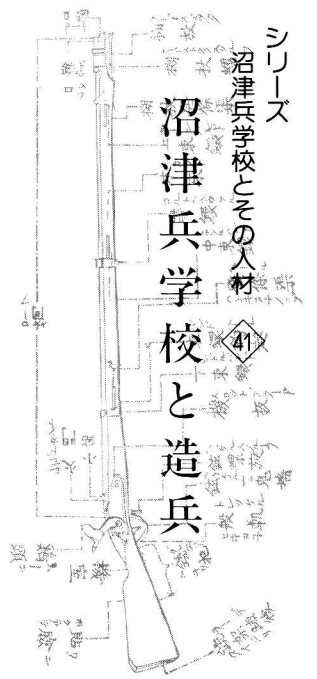
大築尚志（おおつきたかゆき）銅像ミニチュア
（大築志夫氏寄贈）

大築は沼津兵学校一等教授で、後に明治陸軍造兵の父と仰がれた。この銅像は明治43年（1910）6月、東京砲兵工廠の本部玄関前に建てられたものである。太平洋戦争中に供出されるまであった。

製作者の大熊氏広（1856～1934）は工部美術学校でイタリア人教師ラグーザに師事し、さらにイタリアへも留学した明治草創期の代表的洋風彫刻家。他に靖国神社前の大村益次郎像（1893）、有栖川宮熾仁親王像（1903）などの作品がある。

シリーズ
沼津兵学校とその人材
41

沼津兵学校と造兵



兵器を製造することを造兵という。軍事組織にとって造兵部門の存在は欠かせないものである。沼津兵学校にもそれがあったらしいことがわかっている。沼津城本丸の二重櫓は兵学校の武器庫であり、そこには数千挺の小銃と武器類が保管されていたという。それらを管理する部門があって当然といえよう。

教職員の中に「火工方」という肩書の人物が一名いたが、火工とは弾丸に火薬を詰める作業のことである。柏原淳平がその人であるが、彼の履歴は不明である。

職員名簿『沼津御役人』には軍事掛附出役二十八名が記されているが、その中に江川隼太・胝市（あかり）十郎・国友勇次郎らの名前がある。同じく『静岡御役人附』のほうにも同役二十四名中に江川らの名前がある。

江川隼太は隼人ともいい、後に永脩と改名したが、静岡藩時代の以下のような経歴が判明している（韮山町柏木俊孝家文書「先祖書并勤役中次ニ家族共明細書」）。明治元年十一月「十四日駿州沼津着、翌十五日御殿江出勤着届并御印章返却、中川虎一郎江相済、同月廿三日服部綾雄殿御書取ヲ以、陸軍生育方頭取支配無役被命候旨、阿部邦之助申渡、同日同前御同人御書札ヲ以、陸軍生育方出役被命候旨、立田政吉郎申渡、同年十二月陸軍生育方制鉄鍛冶所被命、明治二巳年正月御家臣之内江器械鍛工制作教授方被命相勤、同年五月廿三日服部綾雄殿御書取ヲ以、生育方肝煎格被命相勤、同年七月十日為御褒美、金千疋被下置、於御殿頂戴仕相勤罷在、同年九月六日陸軍生育方役々迄も不残御廃止ニ付、同月為御褒美金拾両頂戴、同年十月廿日其身一代三人扶持被下、一等勤番組被命候旨、服部綾雄殿御書取ヲ以、白戸砂申渡、制鉄鍛工所取立方之義者、追而可及沙汰迄是迄之通勤居候旨被申渡、相勤罷在候処、同十月廿九日軍事掛附出役被命相勤、明治三午年三月右鍛工教授方并軍事掛附出役、願之通御役御免被命」

最初明治元年十二月に陸軍生育方制鉄鍛冶所、そして同二年正月に器械鍛工制作教授方に任命されたというのである。江川は明治十年（一八七七）に宮内省が刊行した『明治孝節録』第四巻にその履歴を掲載された篤志の人でもあった。その全文も掲げてみよう。

江川永脩

浜松県貫属の士族江川永脩、はじめ旧幕の陸軍鎮撫頭取にて、よくその職掌を守り、片時も怠慢なく勉励せしに、己巳の年、徳川氏駿河に転封のとき沼津に移りて、それより近傍の壮士を集め大小銃火門の機械をつくり直し、火薬製造の教授をなし、やう〻に衆庶を引立しかバ、つひに旧藩知事これを聞て其志を感し若干の金を与へられたりその後命によりて三方原の大谷へ移りしに、この地ハたゞ百余戸の小邑にて風化及ばず固陋の者のミおほし、やゝもすれバ法令を誹議し開化の人をミて却て蔑視す、こゝに於て永脩ミづから鋤鍬をとりて不毛を開拓し荒畑を修め茶園を営ミ貧者に貸与して業を勉強せしめ、或ハ自費を以て大谷の険路を修繕し行人に便ならしむ、これらの尽力人のすること能はざる所なるにより金二千匹に農具をそへて賜へり

彼が沼津で銃砲や火薬の製造を教授したことが記されている。沼津兵学校に銃砲の鍛冶方があったことは、明治四年（一八七一）八月十日の「沼津兵学附鍛冶方職覚度者勤番組并子弟厄介ニ而も弁当持参同々罷出槌打出来之上ハ少々手当被下」（『山中庄治日記』）という廻状からも裏付けられる。鍛冶

の技術を覚えたいという藩士を募集するという達しである。

胝市十郎については、胝家に関する北村陽子氏の研究（「公儀御用鉄砲師と幕末」『歴史評論』五四七号、「もう一挺のペリーのピストル」『銃砲史研究』二七〇号、一九九五年）によってその出自と履歴の一端が明らかになった。

胝家は伊賀国を生国とし、元は織田信長の家臣滝川一益の鉄砲鍛冶だったが、後に徳川家康に仕えたという。以来、幕府の御用鉄砲師をつとめ維新に至った。市十郎はその九代目の当主であり、安政期にゲベール銃を量産した功績により志摩の受領名を賜り、その後も銃器の国産化に取り組んだことが知られる。

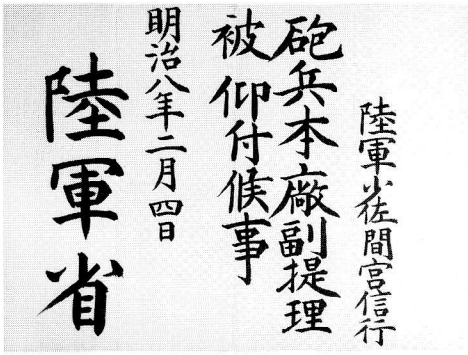
国友勇次郎は、近江国国友の出で幕府に仕えた御用鉄砲師国友家の人で、幕末には元込雷斧小銃を製造したことが知られる。

江川・胝・国友らが属した軍事掛附出役は静岡藩・沼津兵学校の造兵担当であったと推測される。

ピストルと小銃を手にした御鉄砲玉薬奉行間宮将監
慶応元年（1865）5月　50歳
（間宮丈夫氏提供）

なお、『沼津御役人』には「軍事掛附御職人」として渡辺文七・山本勘蔵・坂本藤五郎の三名が記されているが兵器製造に関わる職務かどうかは不明である。

一方、兵学校の生徒たちにも兵器製造に関する知識が教えられたらしい。本業生砲兵科の科目には「砲術」の中に「火工」「各種大砲弾丸の製作并用法」「小銃并運輸諸具の製作理解並用法」といった内容が掲げられている。歩兵科でも「諸種小銃之組立弾丸薬包之罷製造并其利害得失も篤と心得可罷在事」とされている。



間宮信行の砲兵本廠副提理辞令
（間宮信征氏寄贈）

本業生に進級した者は誰もいないが、資業生の段階でも造兵技術の伝習が行われたらしい。資業生の石橋絢彦が後年に回想した以下の証言がその根拠である（「沼津兵学校沿革（八）」『同方会誌』48、一九一八年）。

●鋳丸稽古

一ト通り火薬製造の講義を終り実地に鉛を溶解して型を持て銘々弾丸を鋳る事も教へられたり是は順番に出席し数日間に亘りたり

もっともこの記述からも伺えるように本格的なものではなかったと推測される。同時期、鹿児島藩では幕末以来の集成館において大規模な造兵事業を行っていたが、明治三年同藩に御貸人として出張していた沼津兵学校資業生吹田鯛六は、その盛大ぶりに「驚入候」と手紙で報じてきている（樋口雄彦「史料紹介　静岡藩士の鹿児島だより」『韮山町史の栞』15、一九九一年）。沼津での兵器製造は鹿児島のそれに及ぶべきもなかったのであろう。

沼津兵学校の職員・生徒の中には、それ以前において、あるいはそれ以後において造兵に関与した者が少なくない。

一等教授**大築尚志**は、沼津兵学校出身で造兵部門で活躍した者の筆頭である。彼は明治八年（一八七五）から十一年まで砲兵本廠提

理をつとめた。砲兵本廠とは陸軍の銃砲・弾薬などの製造・修理・支給を統括する部局であり、提理とはその長官であった。在任中は西南戦争への補給や国産第一号の小銃村田銃の開発などを行った。大築は明治陸軍において造兵の父と称され、東京小石川の砲兵工廠内に銅像が建立された。

兵学校三等教授**間宮信行**の父将監（信成・梅翁）は、万延元年（一八六〇）から御鉄砲玉薬奉行をつとめた人で、胝家の上司であった。信行自身も幕府陸軍以来砲兵を専門とし、政府陸軍では砲兵中佐で終わったが、造兵司出勤、大阪大砲製造所長、砲兵本廠副提理を歴任するなど造兵部門に携わった。信行の義弟でやはり兵学校三等教授だった**天野貞省**は、慶応四年正月に御鉄砲玉薬奉行に任命された経歴をもっていた。

他にも沼津兵学校教授陣には、万年千秋・黒田久孝・永持明徳など、明治陸軍の造兵分野に関わった人物が少なくない。

生徒では以下の人々である。

第二期資業生**田付直男**は、家康に仕えた田付流砲術の流祖田付景澄の子孫で、代々四郎兵衛を名乗り幕府の鉄砲方をつとめた家柄であった。幕末には講武所砲術師範をつとめたが、三十歳代であったにもかかわらず沼津では一生徒になっているというのは、田付流が既に時代遅れになっていたことを象徴しているようである。

第六期資業生**秋元盛之**は、上京後陸軍士官学校を卒業、以後陸士教官・改正兵語字書審査委員・一馬曳二輪車試験委員・輜重車両審査委員・村田連発銃戦時弾薬数額及徒歩兵装具調査委員・砲兵会議審査官・同議員・築城本部部員等々を歴任するなど、技術畑を歩んだ。大佐で予備役編入後は工科大学（東大工学部）で造兵学を講じた（「沼津兵学校職員伝（二）」『同方会誌』47、一九一八年）。

第六期資業生からはもう一人**天野富太郎**が出ている。彼も上京後陸軍士官学校を卒業、フランス留学の後、陸士や陸大で教鞭をとり、砲兵中佐にのぼった。やはり工科大学で火工を講じた（前掲「職員伝（二）」）。

お知らせ欄

◎企画展「写真・史料にみる占領期の沼津」の開催

昨年12月20日（水）から本年2月25日（日）までの開期で開催しています。昨年夏に開催した企画展「昭和の戦争と沼津」に引き続く戦後五十年記念の第二弾として占領期（一九四五年八月～一九五二年四月）に焦点をあてました。戦災復興と戦後改革をなしとげ現代日本の出発点となったあの時代を見つめなおしていただければ幸いです。

企画展図録『写真・史料にみる占領期の沼津』も一冊一〇〇〇円で頒布しています。

◎上映会「映像にみる戦中・戦後の沼津」の開催

昭和十五年頃制作された出征兵士慰問用のフィルム「銃後の沼津」と昭和二十六年納税奨励PRのため西浦村を題材に国税庁が制作したフィルム「心をあわせて」の二本を上映します。いずれも当時の世相や景観を映し出した貴重なものです。

日時：1月27日（土）午後2時～

場所：明治史料館講座室

参加：無料・申込み必要なし

定員：一〇〇名

◎明治史料館ロビーでは以下のビデオ作品がご覧になれます

「江原素六と沼津」

「先憂後楽の人　江原素六」

「沼津兵学校」

「沼津の国学」

「沼津藩」

「愛鷹牧」

「沼津の戦争史跡を訪ねて」

◎新収の新聞マイクロ・フィルムについて

資料閲覧室で公開している新聞マイクロに以下の2種3リールが新たに加わりました。いずれも沼津で発行された新聞です。

『駿豆新聞』明治45・4・15～大正2・3・2

『東駿朝日新聞』大正10・9・5～同11・2・26

沼津市明治史料館通信　第44号
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂三七二―一
電話 〇五五九―二三―二三三五
FAX 〇五五九―二五―二〇一八